

生きた生きた秋



台風情報が気になる所だったが、今年は遅長く西に東に逸れて、その日の猛暑も「緒」掃き出してくれた感じである。この山北では「拳」に涼しさを運び越して、寒い朝となった。中央も俄にが寒い。

「田舎の秋の行事」と言えは先ずは敬老会。公民会長の夫から、毎度のことながらお知らせ文を作成するものについて頼まれる。

去年のお知らせを読み出して、敬老対象の方々の名簿の年齢に1を加算する。ここでも「く」なりの方を削除し、今年七十歳を迎える新老人を追加する。と何と新人三人の足前の中に八ヶ岳登山士であるではないか。

多分東京生まれ、孫にも「囲まれ、オハアチャンと

呼ばれ、嫁さんたちの心遣いもあって、それなりの老人になってきたら、とこゝろが「この過疎でも言える山北にあっては、お正体を先輩たちがわんざかいらつしやるので、私はすっかり娘気分でしたの」に、現実は無情である。

山北の当公民会では、敬老会は花見会と相まって天イベントである。

当日は先ず十一時から庭で班対抗の簡単なゲームをやる。我が公民会が四班あつて、子供からお年寄りまで十人ずつが選手となり、歓声の中を打ち興じる。その後持参のお弁当を開くのだが、当敬老会では八十歳以上の方に派手お弁当が出る。七十歳から五歳までの年齢に当たる人は、三田のAコープの商標系が出る。七十歳の私も有り難く頂いた。昼食後のアトフクシヨンは踊りである。私も仲間に入って良歌を一曲踊った。あまり覚えはよくない方なので、手と足がチクハクで他の人達を引き立たせる結果だったようだ。最後は恒例になったビンゴゲーム。賞品は山のように用意されている。焼酎

二本が目玉言甲で、後は日田田羅舞。若いも若きも幼きも読み上げられる数字とカードの「らめい」。台風一過の爽やかなよい敬孝をたじた。

唐見島市内の友人に聞くと、市内では七十歳と言ってもバスの乗車を着つてらうで何もなしのこと。隣は何をする人で、「と言った地域の連帯の薄い都会の生活を感じる。当地の付き合ひはタサイよつたが、田舎らしい良さが色濃く残っていると思つ

ついで小学校の運動会。小学生のいない私達は運動会は無縁のもので思つていたが、これがまた校区全体の行事なのである。

一昨日以来から毎月末に公民会のお当番が護国墓を集合に来る。つい最近まで税金、健康保険料、水道料など全てが集合の対象となつていて、プライベートも何もなしのに驚いたものだ。その中にPTA会費がある。子供もいないのPTA会費はないだつと思つたが、児童数がなくなつたからなのか、昔からの習慣なのかとどかく各百四十円を提案する。そして毎月の町のお全

戸配付のお知らせの中に「PTA便り」も折り込まれるのだ。

大体、運動会の準備は生徒や学校関係者が行つものばかり思つていたが、我が町ではPTAの役員に加えて各公民会が会長と体育係が参加する。前日の午後、日焼けて赤い顔をして戻つた夫を見ると結構な労働量仕をして来たよつた。

知っている子供もいないこと、私は一昨年まで運動会に行つたとはなかつた。昨年夫が地区対抗の競技「色水屋さん」のメンバーが足りないから出るよつたと言つた。それではこれまで着る機会のなかつた嫁さんのブレゼントのペアのゴルフシャツを取り出し、二人ともそれを着込んだ。私はスカートもショートのコルツ用エロツトにしてサンバイザーを被り、靴もおニューのインボートのニューバフラスと一つ、洒落たいでたらで我が家を出た。こんな時にも洋用になつては形見になつてしまつて思つてのことだ。多分人目を引いたのだつて顔をお互に誰かが一言褒めた。

今年も同じスタイルで出掛けたが、今回は誰も何も言われなかった。どうやらこれが私のスタイルとして定着したようだ。

世話役として朝早くから出掛けていた夫が、何かを取りに戻って来て

「みんなのお弁当を持ってきていよう」

と言いつ、歩いて五分もかからない所にいるのに、何かお弁当だろつと思つたが、役目でもあつて帰れないとしたら困るだろうなと気遣、二人分作つて持つて行くことにした。

と言つても朝はパン、ご飯を炊く準備はしてあつたが炊きあがる迄に二時間は掛かる。私は冬凍の海鮮寿司を解凍して、リンゴで梨を刻み、お絞りと水筒を持つて出掛けた。折しも台風十五号が東の海上を北上しているなかで、逸れた唐島の空は抜けるような青だ。新体育館も三成新近で、校庭も新たに整備されムクムクとしている。幾筋もの国旗が色鮮やかに奈波の風にはためいている。旧輩数よりも父兄や参加の住民の方が多い

我が校区の運動会には、何となく「参加する」といふ意義がある」といふ言葉通りの、歓声と笑い声の渦を渦ちた大会であつた。私の出場した「色水屋」んはチーム最下位で「これも」愛嬌といつべきだろう。父兄のマネゲームはお揃いの黄色と赤の手袋をほめてよく練習を繰り返していた。

お昼になつた。体育館が未完成なので、新校舎の一階が開放された。私達は階を登つて廊下の隅に座り持参した海苔のお寿司と果物をとり出して食べ始めた。ふとお隣の豪華なお弁当が目に入つた。老人も交えた家族七、八人がそれを囲んでいる。

大きな海苔の甘辛煮やスコッチエッグ、焼き鳥などの串焼きや肉団子、枝豆などおどろかす綺麗に盛りつけられたオードブルの皿が「うん」飯はお揃いと山菜羹おどろかすお重に詰めてられている。こんな立派な御馳走を作るにはおそ手間暇がかつたことだろう。反対側を見ると、それは我が家の近くの建設業の一家で、背を丸めたおぼろちゃんも親も子供たちと一緒に輪になつてい

る。御馳走は身えないが、これまた何種類ものツッパ―が並んでいる。見れば相場を使つ冷水のボンベも持ち込まれている。なるほど、「こゝろ」では運動会が家族揃つての楽しみな行事のたゞ心から納得した。

我が家の子供たちの運動会のお弁当は、いつも栗飯と決まつていて、長男の入学から未婚の卒業まで、実に連続して十七年間も栗を刻き続けて来た。おなすもそれなりに作つて来たが、それは子供たちのもので、親も一緒に食べることはなかった。唐草とは一般的形態なのだ。どうか、大家族のめくもりの微笑までを感じて貰へるものだった。

今年はず休みには消防団の放水の演技があるといつので校庭に出た。殆どが各々のなか制服を身を守るのを見分けがつきにくい。いつもは何といふことのないおなすも、真面目にもモジと敬礼したり、報告をしていゝ。手を腰に駆足で走り、テモパキとホースの処理をする。私達の安全もこつした人達の知られぬ訓練によつて護られてゐるのだ。

残暑で乾いた校庭だが、熱いのある放水は庭の隅に届けられた。台風の子波の風が霧のような水を私達に吹きつける。それも終わると、私は自分の出番もないこととして午後の部はパスして一人家に帰つた。

夫は、運動会を引き続いて行われる地区の役員や係の人達と打上会に出て、日暮れた頃、機嫌で帰つて来た。全て嶋調で、和やかに盛装したとのこと。めでたしめでたし。父兄が運動会の準備をしたり、大かかりな夏祭を実行するなく、様々なイベントに力を出していることが、「入来新能」の美行の原動力になっているのだと思つた。

この後また町民体育祭、収穫祭など行事は続く。稲刈りも間近だ。心弾む秋。敬老された年がでられて、生き生きと秋を楽しもう。